

論文の概要及び審査結果の要旨

氏名 末次絵里子

学位の種類 博士（教育学）

学位記番号 甲第 26 号

学位授与の要件 大阪総合保育大学学位規程第13条

学位授与の日付 令和 5 年 3月 19 日

学位論文題目 子どもの心理アセスメントとしての人物画の有効性とその
活用について～人物描出の発達過程への着目から～

論文審査委員 主査 小椋たみ子（大阪総合保育大学特任教授・博士（文学））

副査 渡辺俊太郎（大阪総合保育大学教授・博士（心理学））

副査 高橋依子（大阪樟蔭女子大学名誉教授・博士（文学））

〔1〕 論文の概要

子どもの心理的、発達的な臨床事例に対する心理アセスメントには種々な方法があるが、論者は人物画をアセスメントの手法として使用することが有効であるとの考えに立ち、臨床実践事例と保育園児の人物画を対象に研究した論文である。

提出された博士論文の各章は以下で構成されている。

序章

1 章 子どもの心理アセスメントとしての人物画について

第1節 子どもの心理アセスメント

第2節 心理アセスメントとしての人物画の発展

第3節 人物画に表現される自己像と身体意識

2 章 最近の人物画研究についての知見

第1節 幼児の人物画研究の知見

第2節 広汎性発達障害児の人物画研究について

第3節 まとめ

3 章 本研究の目的と仮説

第1節 目的

第2節 方法

4 章 調査研究～描画発達の過程への着目から～

第1節 幼児の心理的発達となぐり描きの変化の過程

第2節 幼児の人物画の縦断調査

第3節 まとめ

5章 実践的研究

—子ども理解における人物描出のアセスメントとしての有効性の実践—

第1節 実践的研究の目的

第2節 発達上の難しさのある子どもへの支援と人物画活用の実践

第3節 母子関係へのアプローチと人物画の活用の実践

第4節 保育者へのコンサルテーションにおける子どもの人物画の有効性

第5節 実践的研究のまとめ

6章 総合的考察

第1節 二つの仮説の実証について

第2節 人物描出の発達過程への着目から

第3節 心理アセスメントとしての人物画の活用に向けて

論文の意義

今後の課題

文献

1章では、子どもの心理アセスメントについての見解、心理アセスメントとしての人物画の活用についての意義、心理アセスメントとしての人物画活用の理論の紹介、日本での人物画研究の紹介、人物画に表現される自己像と身体意識について、論者が依拠する Wallon (1949/1969)、Frostig (1970 /2007)、鬼丸(1981, 1996)、山形 (2000)などの見解から、子どもは特に母親との直接的な触れ合いを伴う関係性の中で自己の身体感覚、身体意識を形成し、この過程が人物画に描出されるとしている。また、発達障害の子どもは特に対人関係面の難しさから母子関係の構築が悪循環を呈していることにも触れ、発達障害の疑いがある子どもの描画は定型発達児の表現とは異なる様相を呈していることを述べている。

2章では、幼児の人物画研究と、発達障害児の人物画研究の先行研究を整理し、幼児については、人物画に描かれた身体部位、バランスの発達的变化、性差などについての研究を概観した。発達障害児の人物画の特徴について、DAM と知能検査からの妥当性研究、人物画アセスメントによる治療効果研究を概観し、論者の観点からの見解を述べている。

3章では、論者の研究の問題の所在を明らかにし、調査研究の目的と方法について述べた。調査研究の目的は、視覚的に人物画としてとらえることができる段階の子どもの描出だけではなく、初期描画、つまりなぐり描きから人物画に至る描出過程に着目し、その意義を明確にする。そして、子どもの初期描画から人物画に至る変化の過程をどのように見て活用することが有効なアセスメントになるのか、さらに、保育の現場などで、子どもの初期描画から人物画に至る過程に着目して活用する方法について、以下の2つの仮説を実証することを通し、提案することとした。

第一の仮説は、「子どもの人物画は、子どもにとって、他の対象物とは異なる表現であり、

なぐり描きから頭足人、人物画と進んでいくその流れから、子どもの身体的なもの、心的なもの、社会的なものを総合的にアセスメントできるツールである」、第二の仮説は、「母子の情動によるコミュニケーションが上手く蓄積されていく中で子どもは自己を知るようになる。そのコミュニケーションの在り方としては、感覚的な刺激、発達の状態に合わせた身体を用いた遊びの活用、身体的な刺激が鍵となる。また、子どもが自己と他者を見出し、身体意識を確立していく、その過程が、人物画の発達に表れる」である。

4章では、論者が実施した調査研究を報告している。第一節では、「幼児の心理的発達となぐり描きの変化の過程」として、保育園の園児を対象に行った調査から得た「定型発達をしている子どもの描画」と、治療的かかわりの実践場面から得た「発達の遅れや偏り等の疑いのある子どもの描画」を、それぞれ複数の事例を取り上げ、特になぐり描きの変化の過程に着目して整理、検討した。なぐり描きの変化の過程を「偶然のなぐり描き」から「意図的ななぐり描き」へさらに「意味づけのなぐり描き」の3段階に分類し、社会的関係、感覚運動的発達の2側面が相互に関与し、身体像・自己像の構築になることを考察し、子どもの早期の描画の発達をとらえることは、一つの有効的なアセスメントとして活用できることを提起している。

4章第二節は、保育園児を対象に行った人物画の縦断調査を詳細に分析した。第一期で2歳児、第一期で年少児、第一期で年中児をほぼ半年ごとに3回、第一期で年長児を半年ごとに2回、同一児を追跡調査している。アセスメントとして人物画を活用する上では、刻々と変化する時代に応じた子どもの描出の傾向を把握しておくことが重要だとの論者の観点から、現在、子どもたちの心や身体はどのような状況に置かれているのか、そして子どもたち自身、自己の身体イメージをどのように形成しているのか、論者が依拠する鬼丸(1981)、津守(1987)の理論に基づき、論者独自の指標を設定した「人間の内側に属するもの」(目、口、鼻、耳)、「外界と人間を関係づけるはたらきをするもの」(手が棒、足が棒、手も足も棒、手も足も肉付き、手も足も無し、手か足に指)、「外界に属するもの」(毛髪、服、頭に装飾、服に装飾)の15の指標を設定した。さらに、直接の身体感覚と直接の身体感覚とは異なるものとのバランス1と、身体感覚とは異なる「髪」と直接の身体感覚とのバランス2の指標を独自に設定し、分析した。また、小林・伊藤(2017)のDAM新版に従い得点化し、DAM-IQ、DAM-MAを算出した。量的分析の結果と各年齢群で時期が概ね重なっているところで類似の継時的変化の結果があらわれている部分を整理し、年少の学年の後半時期(3歳後半から4歳後半にかけて)に、「目」と「手足」の表出が顕著に増加、年中の学年の後半時期(4歳後半から5歳後半にかけて)に、「鼻」の出現が減少、「手足肉付き」が増えたこと、年長の学年の後半時期(5歳後半から6歳後半にかけて)には、「服」の出現が増加、「手足肉付き」の出現が減少したことなどを特に主要な結果としている。鼻の描出の減少、目と口の描出の増加などはテレビや漫画、電子機器などの視覚的な刺激の過多の現代の特徴ととらえ、身体感覚に基づく実体験の蓄積が子どもにとり重要と考察している。また、DAM-IQについては、男女を統合した結果ではほぼ、すべての時期においてDAM-IQの平均は100を超

えていた。性差については、「第1期で2歳児」群では有意に表れなかった性差が、それ以降は女兒が高得点で先行研究と一致したことを述べている。第4章2節の主たる量的分析の結果から、DAMでは測りきれない、子どもの人物画に表れてくるバランスを吟味するためにも、筆者が作成した指標を用いて分析することには意義があったとしている。

5章では、論者の4つの実践事例研究をあげ、子ども理解における人物描出の有効性の実際を検討した。第一節の研究は、「発達上の難しさのある子どもへの支援と人物画活用の実際」として5事例をとりあげ、知能検査の結果と人物画の論者の解釈を述べ、発達障害児の心理アセスメントにおいて「低い自己評価」「弱い身体イメージ」「特定部分への固執」「知的レベルに比して低い描画能力」「独特な発達変化」の特徴があるとしている。

第二節では、特別支援が必要な小学生7事例の人物画と知能検査の結果、認知的特性、情緒的特性、支援について述べ、人物画から得られる多角的な情報を使用し、母子関係の構築や学校教員との事例の共通理解に人物画が有効であったことを述べている。

第三節では、病院の臨床心理士として3歳7か月から7歳8ヶ月まで断続的にかかわった事例について、山上（1999）が対象関係と象徴機能の発達を軸として区分した5期に、社会的人間関係成立の6期をくわえ、情意系、感覚運動系、音声言語系、身体にかかわる感覚・活動系、と症状の特徴と変化・描画、母子の様子と変化、セラピスト（論者）の関わりのポイントから治療経過を分析し、描画が母親や病院の他スタッフと子どもの状態像を認識する上で重要な役割を果たし、発達促進に有効であったとしている。

第四節では、論者が臨床心理士として医療機関で子どもの人物画を中心に据えて、母、保育者へのコンサルテーションを行った2事例を報告している。保育者は論者のコンサルテーションから得た情報をもとに子ども理解を深め、保育の工夫を行ったことから、母子関係の支援だけでなく、保育実践でも人物画アセスメントが有効であるとしている。

6章の総合的考察では、第3章でたてた2つの仮説について、4章と5章の結果を踏まえて検討し、心理臨床や保育の現場で、人物画を心理アセスメントで有効に活用し、人物画を子ども理解の中軸に据え、情意系へのアプローチと運動・感覚・認知的側面へのアプローチという両面からの支援を構築することが重要であることを提言している。

〔2〕 審査結果の要旨

大阪総合保育大学課程博士審査基準に添い、本研究の評価を述べていく。

第一の研究業績を踏まえた集大成であると認められる点については、論者の臨床心理士としての長年にわたる実践からの問題意識をもとに、人物画の有効性を論者の臨床事例と保育園児の調査により明らかにしようとしたことは評価に値する。4章、5章の一部は査読付きの雑誌に掲載されているが、各論文を統合した博士論文にまとめると、論理性、統一性において課題がある。

1 章、2 章、3 章は未発表

4 章第 1 節 幼児の心理的発達となぐり描きの変化の過程. (2021). 子ども・子育て支援研究センター年報, 11. 5-18. 【査読無】

4 章第 2 節 幼児の人物画の縦断調査. (2021). 広島文化学園短期大学紀要, 54, 35-56. 【査読有】

5 章第 2 節 発達障害児の心理アセスメントとしての人物画テストとその活用について. (2003). 臨床描画研究. 18, 196—210. 【査読有】

5 章第 2 節 発達障害児への人物画テスト. (2012). 徳山大学総合研究所紀要, 34. 119-134. 【査読無】

5 章第 3 節 自閉症児と母親の関係性の発展～描画表現を通して～. (2020). 臨床描画研究, 35, 120-140. 【査読有】

5 章第 4 節 保育者へのコンサルテーションにおける子どもの人物画の有効性. (2020). 大阪総合保育大学紀要, 14. 97-111. 【査読有】

第二の独創性については、第一に、臨床事例だけでなく、保育園児を 2 歳児クラスから年長児クラスまで、ほぼ半年ごとに同一児を縦断調査し、年齢推移に伴う人物画描出の指標の変化をあきらかにしたこと、第一節で、人物画だけでなく、「偶然のなぐり描き」から「意図的な殴り描き」、さらに「意味付けのなぐり描き」の過程を明らかにしたことは意義があるが、方法、結果の解釈に課題がある。また、4 章第二節の、保育園児の分析に使用した指標は独創的であるが、従来使用されている先人たちの指標などを吟味して採用したわけではなく、さらなる検討が必要である。また、臨床事例については DAM の評価法による DAM-MA, DAM-IQ と論者の解釈だけが述べられている。DAM の個々の指標、保育園児の調査研究で使用した論者作成の人物画指標や Koppitz (1968/1971) や Machover (1949/ 1974) の情緒指標での分析や空間象徴図式などの分析は今後の課題として残されている。

臨床実践に長年、携わり、論者自身の実践知、直観や、独創的な発想も必要な臨床実践の場のデータを使用した研究である点においては、独創的であるといえるが、先人たちの研究成果を踏まえ、また理論のより深い理解に基づいた観点から新たな発想を展開した独創性には課題が残されている。

第三の申請論文の属する研究領域において、その水準の引き上げに資するものであることについては、心理臨床の場において、人物画は時間もかからず、また、クライアントに負担をかけず実施できること、人物画に表現された自己像、身体像をはじめとするクライアントを理解するための情報が多々あり、アセスメントの方法として有効である。今後、人物画を心理臨床実践、保育現場、教育現場で活用することは、子ども理解の水準の引き上げに資するであろう。

第四の学際性については、論者は、現在は保育士養成機関で教鞭をとり、また、幼稚園、保育園での研修やコンサルテーションも行っている。保育現場や子育て支援の場などにおいて保育実践や育児のアセスメントとして人物画を活用し、関係性と感覚運動的側面の発達を評価し、子どもの発達の支援を構築するための有効な方法を提案したことは意義があり、臨床発達心理学、保育学、看護学などの場でも活用可能で、学際性がある研究といえる。

第五の本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと認められることについては、論文の論理性、理論の読み込み、読み手に伝わる表現などには不十分な点があるが、以上、述べてきたように心理臨床、教育、保育実践に貢献する研究であり、本学大学院が授与する博士（教育学）の学位にふさわしいと考える。

以下に、博士学位請求論文公開審査会において審査委員により出された質疑応答について主なものを記載する。

第一に、論者の沢山の臨床事例の人物画からどのような基準で事例を選択し、どのような治療構造で実施し、どのような観点から描画の特徴を抽出したかの質問に対して、臨床事例は初期に行った研究で、事例はデータを保持している事例、自己の身体を描出があらわれていない、見たものをそのまま表現したことが明確な事例をとりあげたこと、また、分析の観点については、今後、検討する必要があるとの回答を得た。

第二に、保育園児の人物画調査の実施状況の質問に対して、保育園児が日常生活している保育室で小グループにわけ、保育者が傍にいて、子どもが緊張せず、子どもの言語表現がでてくる設定で行った。1歳児クラスの描画は、「偶然のなぐり描き」から「意味付けのなぐり描き」の過程を明らかにする目的のために、ことばが明確に表現されたと論者が判断した5名だけのデータをとりあげたとの回答があった。

第三に、保育園児の縦断データで論者が作成した指標で明確になったことは何かについての質問に対して、「足、手の描出がなし・棒・肉付きあり」の指標と、「頭・服の装飾有無」のバランスで、年長児で手足肉付きであった描画が減少し、逆に装飾が増えたことと、鼻の描出が年中群で減少したことと、2歳児以外は女兒のDAM-IQが高く先行研究と一致していたこと、改訂された小林・伊藤（2017）の指標で分析したことにより、旧版の指標を使用した先行研究で指摘されていたDAM-IQの平均が100以下の年齢群は本研究では、みられなかったとの回答があった。

第四に、論文中の文献の記載の統一がとれていないので修正するようにとの指摘があっ

た。

よって、本論文は、審査者の意見に従い、修正が必要であるが、心理臨床、教育、保育実践に貢献する意義を踏まえ、博士(教育学)の学位を授与することを認める。